

救命救急センターに搬送された自殺企図者の特徴 —自殺予防に向けた初回自殺企図および自殺企図の再発に関する後方視的研究—

衛藤 暢明¹⁾, 喜多村泰輔²⁾, 田中 経一²⁾,
石倉 宏恭²⁾, 西村 良二¹⁾

¹⁾ 福岡大学医学部精神医学教室

²⁾ 福岡大学医学部救命救急医学講座

要旨:背景:平成10年にわが国の自殺者が3万人を超えて以降,自殺に関する問題は大きな社会問題となっているが,その実態解明は十分に行われていない.われわれは3次救急を担う医療機関である福岡大学病院救命救急センターに搬送された自殺企図者に関する調査を施行した.

目的:自殺企図者の特徴を明らかにすることを本研究の目的とし,調査の対象となった自殺企図者が,特に初回の自殺企図であるか,再企図であるかという視点から検討し,自殺企図の一次予防(未然に防ぐ)および二次予防(再企図の防止)の方法について考察した.

対象と方法:平成18年4月から平成19年12月の21ヶ月間に,115人の自殺企図者が救命救急センターに入院となった.精神科医による本人の面接,もしくは心理学的剖検に倣った家族や知人などからの情報聴取により115人中78人の自殺企図者に関する詳細な情報を得る事ができ,この78人を解析の対象とした.自殺の意図の強さをSIS(Suicide Intent Scale)によって評価し,自記式の心理学的評価スケールを用いて解離症状および衝動性を,それぞれJ-DES(Dissociative Experiences Scale)およびBIS-11(Barratt Impulsiveness Scale, 11th version)によって評価した.

結果:対象者78人中39人が初回自殺企図者,39人が再企図者であった.人口統計学的特徴で,対象者全体の半数を超える者で示した自殺の危険因子は,独身および別居,死別,離婚の合計(59%),働いていない(67%),精神科受診歴あり(65%)であった.また,自殺企図の状況に関しては,周りに誰もいなかった(59%),誰にも助けを求めなかった(72%)の2項目で半数を超えていた.自殺の意図の強さ(SIS)では,客観的環境(SIS-I)の平均得点は6.34,自己申告(SIS-II)の平均得点は8.65であった.心理学的側面からの評価では,対象者全体のJ-DESの平均得点は15.5(調査対象:50人)であり,BIS-11の平均得点は52.5(調査対象:50人)であった.

初回自殺企図者と再企図者に分けた場合,いくつかの項目で異なる特徴を認めた.初回自殺企図者の特徴として,中高年(45歳以上:56%),男性(54%),精神科受診歴のない者(56%)があげられ,精神科的診断(ICD-10)診断分類としては,F3の気分障害(33%)およびF4の神経症性障害(36%)が多く認められた.一方,再企図者では,若年(44歳以下:77%),女性(79%),就労していないこと(85%)を特徴として認め,精神科的診断はF3の気分障害(33%)とF6の人格障害(28%)が多かった.また後方視的に見た場合,再企図者の62%が前回の自殺企図から1年以内に,72%が2年以内に自殺企図の再発に至っていた.

結論:初回自殺企図者と再企図者ではいくつかの点で特徴の違いを認めた.本研究で明らかになったこれらの重症自殺企図者に関する特徴は,自殺企図の一次予防および二次予防において役立つものと考えられた.

キーワード:自殺企図,自殺予防,救急医療,自殺企図の再発,後方視的研究